様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　6　月　1　日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）
研究期間：2008～2009
課題番号：２０８２００７１
研究課題名（和文）　中世仏教絵巻の制作・享受・交流の「場」とその文化史的背景に関する調査研究
研究課題名（英文）　Studies on the medieval Buddhist picture scrolls focusing on the relation between works and cultural context.

研究代表者
土屋　貴裕（TSUCHIYA TAKAHIRO）
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部・研究員
研究者番号：４０５０９１６３

研究成果の概要（和文）：
本研究は日本中世の仏教を主題とする絵巻を対象として、作品とそれをとりまく文化史的背景に着目して分析を進めた。研究遂行にあたっては、絵巻作品の綿密な調査を重視し、仏教絵巻の詞書や図様が何をもとに生み出されたのか、またそれらが他の作品へとどのように受容されたのかを、物語絵や説話画といった多様な物語絵画における表現との比較から検証を進めた。あわせて、仏教絵巻が構築する中世日本の世界観や歴史認識に関しても議論を深めた。

研究成果の概要（英文）：
These studies consider medieval Buddhist picture scrolls, in particular, focusing on the relation between works and cultural context. Specifically these studies were based on the close inquiry into hand scrolls, consider the source of text and image of Buddhist picture scrolls, and how these text and image were receptive to other works, in comparison with other narrative paintings. In addition, these studies analyze the view of the world and historical consciousness constructed by Buddhist picture scrolls in medieval Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,050,000	315,000	1,365,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,250,000	675,000	2,925,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・　美学・美術史
キーワード：美術史、日本中世、絵巻、天狗草紙、遊行上人縁起絵、是害房絵、玄奘三蔵絵

１．研究開始当初の背景

日本美術史におけるこれまでの絵巻研究は、個々の作品の主題、画面の表現、絵の様式史的位置、文献史料に裏付けられた成立の背景の解明を中心課題として進められてきた。1950 年代から 60 年代には『日本絵巻物全集』、1970 年代以降には『日本絵巻大成』（正・続・続々）といった、作品全巻の図版を掲載した図書が刊行され、それぞれの絵巻に関する研究を大きく深化させた。その際、各作品はテクストの性格ごとに、物語絵巻・説話絵巻・高僧伝絵巻・縁起絵巻といったジャンルに腑分けされ、個別作品が分類、研究されてきた。これらの分類は、1995 年刊行、梅津次郎監修『角川絵巻物総覧』での作品分類にも継承されており、今日の絵巻研究者の研究対象の選択、問題意識のあり方やアプローチそのものを大きく規定しているといえる。

その一方で、1980 年代には、隣接する領域からの絵巻研究が活発化し、絵画は「絵空事」で史料的価値を有さない、あるいは単なる「物語の挿絵」といった見方は、これらの分野においても見直されつつある。美術史研究においても、絵巻という媒体が持つ表現方法の特質を解明する研究も進められ、絵巻独自の画面構成の方法や、絵巻の中の点景表現の特質とその機能が明らかにされた。これらの研究は、主題や作品ごとの研究といった従来の研究の枠組を取り払い、「絵巻」という媒体そのものに注目することで、絵巻研究に新たな視点を提示したと評価できる。

しかしながら、これらの視点がその後の絵巻研究に発展的に継承されているとは言いがたい。絵巻研究は、依然、描かれた主題ごと、個別の作品ごとの研究が主流であるといえる。加えて、他分野からの研究に対し、美術史研究者が積極的に応答・議論することは少なかったと言える。

このような状況を鑑みるならば、これまで自明のものとされてきた中世絵巻の主題ごとの分類を取り外し、作品相互間の図様やその配置の型の交流とその背景を探ることは、物語絵画としての絵巻を分析する上で重要な論点となる。とりわけ本研究が対象とする中世仏教絵巻においては、様々な主題や媒体の視覚表象と比較し、さらに詞書やその典拠となったテクストの仏教思想を多角的に検討することは、今後の絵巻研究、物語絵画研究を推進するための極めて重要な視座となる。このような問題意識のもと、本研究は推進された。

２．研究の目的

本研究は、中世仏教絵巻の制作と享受、交流の実態を、仏教絵巻成立をめぐる様々な「場」やその文化史的背景から明らかにすることを目的とした。

具体的には、諸本の絵と詞の詳細な対校といった絵巻研究の基礎的方法を踏まえながら、それぞれの仏教絵巻が初発の場から離れて、様々な場において伝播・共有されるようになった時、画面やストーリーの表現にはどのような改変がなされたのか、そして、それらのイメージがどのような機能を持ちながら、人々の信仰や世界観を逆に形成していったのかを、隣接諸学の成果に学びつつ、その背景にある文化史的背景の解明を通じて明らかにした。

あわせて、本研究は、仏教絵巻研究を始点として、絵巻研究全般にわたる問題提起を行いつつ、中世における絵巻制作の営みの歴史的な位置を明らかにし、絵画の果たした社会的機能を再考することを目指した。

３．研究の方法

本研究が対象とする中世という時代に制作された仏教絵巻は数多くある。また、数世紀の時を経て、断簡、零巻となってしまった作例も多い。よって、研究期間である二年間という限られた期間内に、中世仏教絵巻のすべてを検討することはもとより不可能である。

そのため、中世仏教絵巻の中でも、制作者、そして享受者の間において、モノとヒトとの活発な交流が成され、かつ多くの作品が集中的に制作された鎌倉時代後期から南北朝期(13 世紀末～14 世紀末)頃を分析の中心に据えることとした。同時に、この時期の仏教絵巻だけでも相当数に上るため、核となる数点の作品を選び、それと問題関心を共有する周辺作品の分析へと、考察の対象を広げていく方法をとった。

具体的には「天狗草紙」、「遊行上人縁起絵」、「是害房絵」、「玄奘三蔵絵」の四作品を重点的な分析の対象として据えることとし、これらの作品と問題関心を共有する作品の調査・研究を進めた。

研究にあたっては、以下の二点の要素を特に留意し、個々の作品研究を深め、関連作品の分析を発展的に行った。

第一に、寺院社会で作られた仏教絵巻が、世俗社会へと制作の場を移すことで、意味・

内容を読み替えられながら享受されていく過程を明らかにし、人々の信仰や仏教絵巻の有する社会的機能を分析した。寺院社会で制作が企図された仏教絵巻は、寺院内に留まることなく、広く世俗社会でも受容されるようになる。それは絵巻の借覧というレベルから、これらの絵巻を新たに作り直し、領有しようとする動きへと展開していく。これらの文化史的背景を絵巻の絵、詞双方の分析、社会的背景の考察、さらには絵巻制作の具体的な場（絵師・工房）の解明から明らかにした。

第二に、寺院社会における世俗的主題の受容と翻案、そしてこれら仏教絵巻の制作・享受の広がりを検討した。物語、和歌、説話といった文学的主題、あるいは物語絵、和歌絵、説話絵といった絵画的主題は、これまで「世俗的」性格を有するものとされ、その享受者も世俗社会に属する人々の存在を前提に考えられてきた。しかしながら、このように一見「世俗的」な主題・画題のテクスト・イメージが、仏教絵巻の中に取り込まれながら、聖俗を越えて受容されていたということを作品に則して明らかにした。

上述の新しい視点による絵巻の解釈と分析に並行して、作品の実際の調査を積極的に進めつつ、詞書や付属文書の翻刻、関連記事の古記録からの抜粋、諸本間の絵と詞の詳細な対校と言った、美術史研究の基礎を為す作業も同時に行った。

４．研究成果

本研究により、大きく以下の二点に集約される研究成果を得た。

第一の成果は、鎌倉時代後期～南北朝期絵師工房の党派性（宗派性）に関する新知見である。

従来の研究では、中世の絵師工房には所属する寺社や権門の属性を留めつつ、活動を展開していたとされてきた。だが、本研究により、鎌倉時代後期～南北朝期の仏教絵巻の中には、他ジャンルの様々な作品間において図像や図様の共有・交換が見られ、さらには様式的特徴の一致する作品も見出された。すなわち、当時の絵師工房は、注文主やパトロンの政治的側面を弾力的に捉え、画業を推進していたと推察される。また、様式的特徴の一致は絵巻作品間のみならず、大画面の掛幅画との共有も見られ、同時代様式と言った枠組みを遙かに超えた大きな様式的潮流を成すものであるとの見通しが立った。あわせて、これら作画の「場」は京都のみならず、南都その他の地域を含んでおり、様式の地域間交流という問題を考える上でも重要な知見を得ることができ、当該期の絵画制作の場を考える上で極めて重要な指摘になるものと確信する。

本件に関しては、未調査作品のさらなる調査分析の推進、京都近辺のみならず鎌倉や太宰府など「地方様式」との同時代的比較により、さらなる研究の深化も期待される。以上の点に関しては、2010 年度中に活字化を予定している。

第二の成果は、鎌倉時代後期～南北朝期仏教絵巻の対外観、世界認識や歴史認識に関する新知見である。

この点は第一の研究成果の上に成り立つものである。鎌倉時代後期～南北朝期仏教絵巻の中には、異国や異国人、あるいは異国との交渉を描いたものが多く存在する。そこに描かれる異国のイメージは、他の多くの作品でも汎用されるイメージであることは従来より指摘されてきたが、本研究ではその引用元となるイメージに踏み込んだ分析を行った。その結果、これらに描かれる異国イメージが単に異国らしさを演出するに留まらず、引用元のイメージの持つ様々なコンテクストを理解した上で踏襲するものであり、これらイメージの選択に、当時の対外観、具体的には「元寇」による世界認識や歴史認識の再編が大きく関わるものであるとの見通しをたてた。こちらの成果に関しても、関連作品のさらなる探究により、美術史研究に留まらない、歴史・文学・宗教学・思想史研究に大きなインパクトを与えうる分析結果を提示できるものと期待される。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①土屋貴裕「鉄心斎文庫蔵「伊勢物語画帖」について」（『美術研究』399 号、pp. 1-36、2010 年、査読無）

〔学会発表〕（計４件）

①綿田稔・江村知子・土屋貴裕「ポートランド美術館所蔵作品調査報告」東京文化財研究所企画情報部研究会、2010 年 3 月 24 日、東京文化財研究所

②土屋貴裕「「異国」をこしらえる―「玄奘三蔵絵」をめぐって―」東京文化財研究所第 43 回オープンレクチャー「人とモノの力学」、2009 年 10 月 2 日、東京文化財研究所

③土屋貴裕「中世伊勢物語絵の系譜―伝土佐光信筆「伊勢物語画帖」の位置―」東京文化財研究所総合研究会、2009 年 3 月 3 日、東京文化財研究所

④土屋貴裕「「天狗草紙」の作画工房―鎌倉南北朝期絵巻研究を捉えなおすために―」

東京文化財研究所企画情報部研究会、2008年6月27日、東京文化財研究所

〔図書〕（計２件）
①浅井和春監修、稲本万里子・池上英洋編『イメージとパトロン―美術史を学ぶための２３章―』ブリュッケ、2009 年、共著（pp.85-102、土屋貴裕「久保惣記念美術館蔵「伊勢物語絵巻」と伏見院周辺」）
②倉田実・久保田孝夫編『王朝文学と交通（平安文学と隣接諸学 7）』竹林舎、2009 年、共著（pp.310-336、土屋貴裕「絵巻に描かれた旅―鎌倉・南北朝期における祖師・高僧伝絵の制作をめぐって―」）

〔その他〕
ホームページ等
http://www.tobunken.go.jp/

報告書・解説・翻訳等
①土屋貴裕「鎌倉・南北朝期における「異国」表象の一端―「玄奘三蔵絵」をめぐって―」（池田忍編『「もの」とイメージを介した文化伝播に関する研究―日本中世の文学・絵巻から―（平成 19-21 年度科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）研究成果報告書）』pp.36-51、2010 年）
②土屋貴裕「「春日権現験記絵披見台」と中世景物画　試論」（奈良国立博物館・東京文化財研究所編『春日権現験記絵披見台共同研究調査報告書』pp.65-67、2010 年）
③何傳馨（土屋貴裕訳）「二点の中国古書蹟における光学的調査―懐素「自叙帖」と孫過庭「書譜」」（東京文化財研究所編『“オリジナル”の行方』pp.39-52、2010 年）
④土屋貴裕「作品解説　虫歌合絵巻（ローマ国立東洋美術館蔵）」（東京文化財研究所編『在外日本古美術品保存修復協力事業平成 20 年度修復報告書　絵画／工芸品』pp.90-92、2010 年 3 月）
⑤土屋貴裕「虫歌合絵巻　ローマ国立東洋美術館蔵」（文化財保護・芸術研究助成財団編『2010 年在外日本古美術品保存修復プロジェクト・カレンダー』2009 年 12 月）

６．研究組織
(1)研究代表者
土屋　貴裕（TSUCHIYA TAKAHIRO）
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・企画情報部・研究員
研究者番号：４０５０９１６３